

建設プロジェクトの企画，実施方法の検討

建設プロジェクト企画研究グループ 高階 実雄（五洋建設）

1. 研究目的

建設プロジェクトをとりまく環境が厳しいものとなった現在では、建設プロジェクトを実現させることは相当困難なものとなっている。したがって新規に、建設プロジェクトを実現させていくためには、従来の推進方法とは異なった新たな方法論の構築が必要となってきた。

また、建設プロジェクトが実現されるか否かは、その時代の社会的・経済的環境、技術水準、さらにプロジェクトの推進組織や計画内容などの各種要因（以下、プロジェクト要因と略称する）により左右される。これらのプロジェクト要因と建設プロジェクトの関係を明らかにすることは、合理的、効率的な建設プロジェクトの企画、実施の方法を考えていく上で極めて重要であると考えられる。

以上の観点から本研究においては、

- ① 建設プロジェクトとプロジェクト要因の関係把握
- ② 建設プロジェクトの企画、実施方法の構築
- ③ ②の方法の具体化に当たっての課題の抽出を目的として研究を進めることとする。

以下に研究計画の概要を簡単に説明する。

2. 研究内容

（1）研究へのアプローチの方法

建設プロジェクト成立のメカニズムは、既に述べたように、不確定あるいは複雑な多くのプロジェクト要因を構成要素とし、それらが互に関連し合っ

する多局面にわたる要因分析やそれら分析結果の様々な角度・切り口による整理であり、そうした分析・整理に基づいて初めてプロジェクトの企画、実施方法の構築が可能となる。

このように、建設プロジェクトという複雑な行為を対象とし、上述したような様々な分析、整理をとおしてその現象の構造を明らかにし、さらに、それに基づいて一種のモデルともいえるプロジェクトの企画、実施方法を構築するといった作業を効率的、効果的に実施していくためには、研究に対するアプローチの視点やその具体的な方法が重要となってくる。

ここでは、研究目的で述べたような視点に基づき、建設プロジェクトの企画、実施方法の構築を効率的、効果的に進めるために、図-1に示すような段階的プロセスに従ってアプローチすることを考えており、研究フローの各Stageを機能的に整理すると次のようになる。

Stage1では、問題を取り組むに際しての目的を明らかにし、今後の研究の方向づけを行なう。

Stage2では、問題の構造を明らかにすることを考える。すなわち、建設プロジェクトの成立に関する調査、分析を行ない、建設プロジェクト成立のメカニズムを明らかにする。

Stage3では、問題の構造に関する調査、分析結果の総合化を行なうという意味で、建設プロジェクトの企画、実施方法のモデル化を試みる。

Stage4では、ケーススタディを試み、提案した建設プロジェクトの企画、実施方法の評価を行なう。

Stage5では、最終的な整理として研究のとりまとめを行なう。

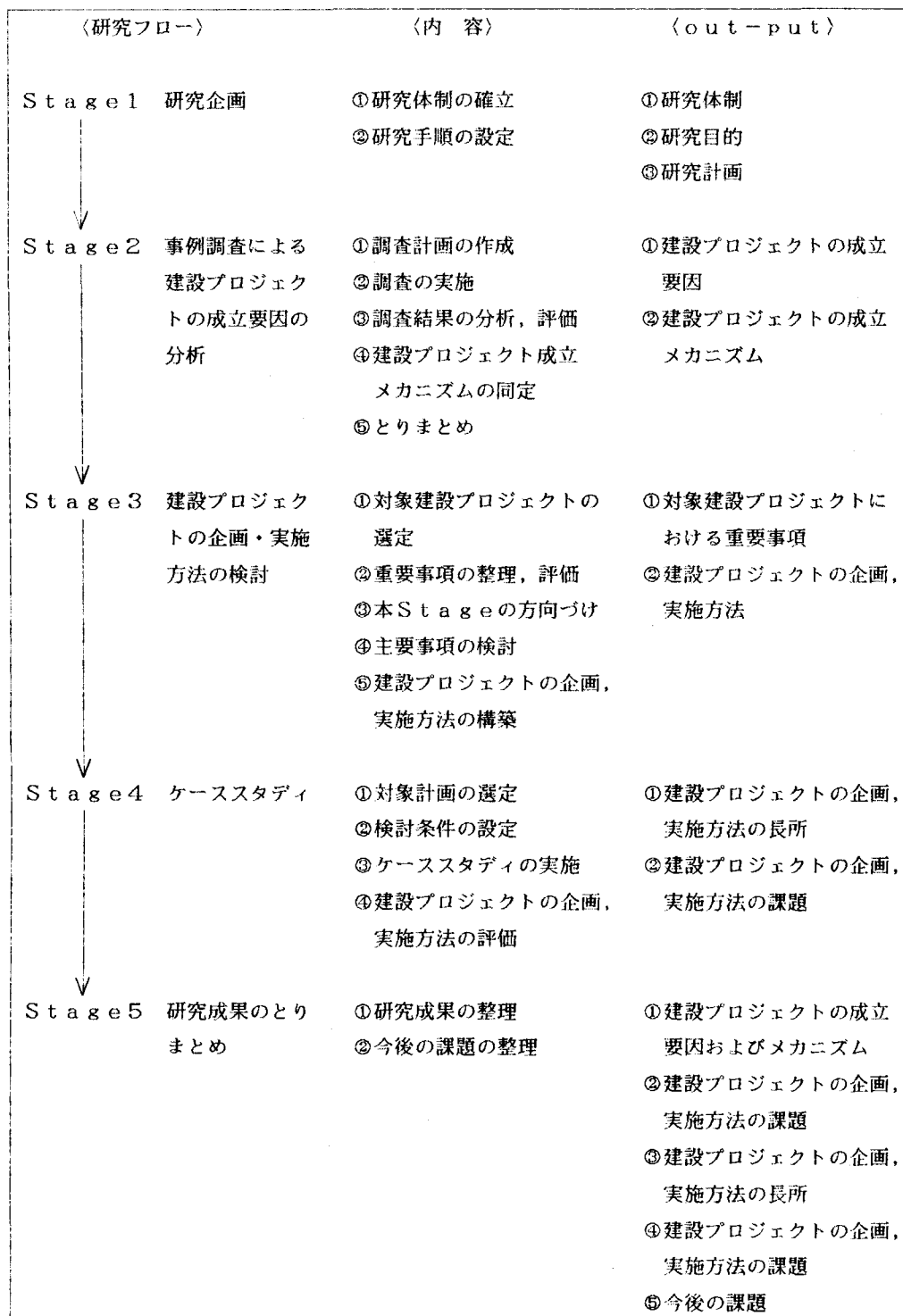


図-1 「建設プロジェクトの企画, 実施方法の検討」の研究フロー

(2) 研究フローの説明

研究フローに従い、各Stageにおける研究内容の説明を行う。

Stage1：研究企画

ここでは研究を始めるにあたって必要となる研究体制の確立（研究グループ構成員の決定、運営方法の決定など）と研究手順の設定（目的の明確化、目標の設定、作業計画案の作成など）を行なう。

Stage2：事例調査による建設プロジェクトの成立要因の分析

最近、新聞紙上を賑わしている東京湾横断道路は、調査開始（昭和41年度）以来20年間を経過しているが、いまだ建設に着手できていない。しかし、

- ① 建設省および日本道路公団などにより20年間も熱心に技術的検討が進められ、建設技術上の目処がたった。さらに、受入れ側の方である千葉県も積極的に着工に向けて運動してきた。このように着工を可能とする準備が十分なされていた。
- ② 反対をとなえていた一部の関係自治体が横断道路の受入れに対し、態度を軟化させた。
- ③ 対外貿易収支の黒字に基づく外国からの貿易不均衡是正のための内需振興圧力を背景に、政界、財界において積極的に大規模プロジェクトの実施機運が盛り上がった。
- ④ 財政難を背景に着工に合意しなかった財政側が、民間活力を活用するという条件付で、着工を原則的に合意した。

などの理由からこわずからヶ月ばかりで急速に着工に向けて動きだした。

このように建設プロジェクトは、そのおかれた時代の社会的あるいは経済的環境、推進者（個人、組織）の能力、センセーショナルなトリガー、技術水準、計画内容などの各種の要因により影響される。

そこで、当Stageでは、現在までに実施された、あるいは実施されようとしたプロジェクトに対し新聞、建設史などによる文献調査や関係者へのアンケート、ヒアリングなどの調査を行ない、プロジ

ェクトの成否に影響を及ぼした要因を各事例ごとに明らかにする。さらに、個々の事例に関する分析結果を様々な軸（たとえば、経済変動、社会変動、プロジェクトの規模や種類など）で整理し体系化することを試みる。当Stageの検討フローを図-2に示す。

なお、ここでは対象とする建設プロジェクトの種類については限定しないこととする。

Stage3：建設プロジェクトの企画、実施方法の検討

ここでは、これまでの分析結果をふまえ、対象とする建設プロジェクトを選定し、建設プロジェクトをできる限り合理的、効率的に推進していくことが

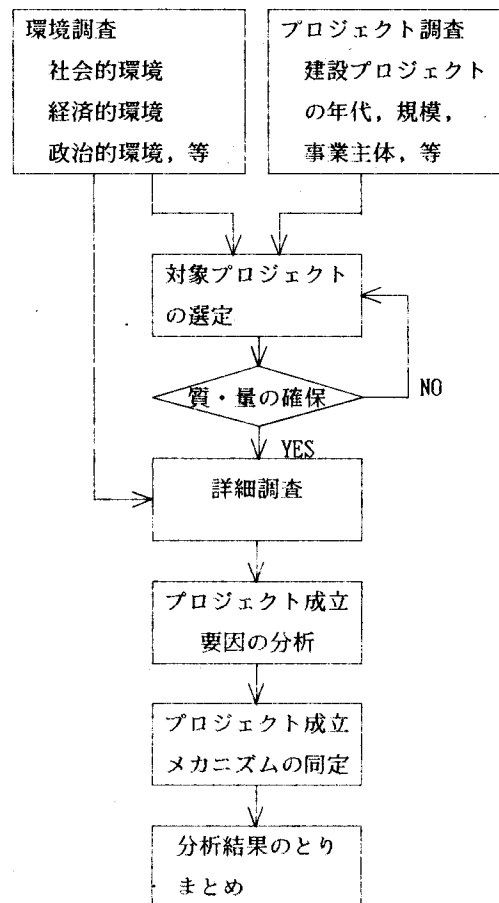


図-2 Stage2の検討フロー

できるような、プロジェクトの企画、実施方法を構築する。なお、プロジェクトの例としては現在のところ、たとえば人工島プロジェクトや都市再開発事業などを考えている。

検討手順として、まずStage 2で得られた分析結果に基づき、対象プロジェクトに対する重要事項の整理と、本Stageの検討方針を明らかにする。次にプロジェクトの企画、実施にあたって検討すべき主要事項（たとえば、事業化方法、利害調整方法など）を検討する。最後に、以上の検討に基づき、プロジェクトの企画、実施方法の構築を行なう。

Stage 4：ケーススタディ

Stage 3で提案したプロジェクトの企画、実施方法の有効性および課題を明らかにするため、具体的なプロジェクトをとりあげ、ケーススタディを試みる。

Stage 5：研究成果のとりまとめ

ここでは、これまでの検討で明らかになった事項を整理するとともに、検討できなかった課題やさらには検討を進めていく段階で新たに生じた課題などを整理する。

3. 研究期間および体制

当研究は昭和60、61、62、63年度の4年間を目標として行なうものであるが、建設マネジメント委員会では研究期間を3年間と決めているため、表-1に示すとおり、Stage 1～3までを3年間で検討し、一応のひと区切りをつけ、追加的に4年目にStage 4、5を検討することとする。

研究グループの構成員としては、大学、官、民間（建設、シンクタンク、銀行など）の各方面からの参加を希望しており、関係各機関に参加の打診をしている。また、研究活動は月1回ぐらいの頻度で東京を中心に行なう予定である。

4. おわりに

本格的な研究活動はまだ開始していないため、今回は研究計画を中心に発表を行なった。ひとりよがりの研究にしないためにも、本討論会においてわれわれの研究計画に対してできるだけ多くの意見を聞き、今後、できるだけ早く研究体制を整え、今年度中に活発な研究活動を開始していく予定である。

最後に、大きな目標にチャレンジしようとしている当研究グループへのできるだけ多くの方々の参加を希望している。

表-1 研究のスケジュール

年 度	S. 60			S. 61			S. 62			S. 63		
Stage 1 (研究企画)												
Stage 2 (成立要因の分析)												
Stage 3 (企画、実施方法の構築)												
Stage 4 (ケーススタディ)												
Stage 5 (とりまとめ)												